

# 戦国期畿内周辺における領主権力の動向とその性格

— 近江国坂田郡箕浦の今井氏を事例として —

長谷川 裕 子

はじめに

戦国期の村落研究は、これまで村落における百姓上層という、いわゆる土豪層の位置づけをめぐる行われてきた。すなわち、彼らは村落に対して在地剰余を搾取する支配階級であるとともに、権力側に対して年貢等を負担する被支配身分である、ちようど村落と権力の中間的な存在と定義され、彼らの村落支配のための運動方向が領主化か、あるいは地主化かということで議論されてきた。<sup>①</sup>しかし、土豪層が権力への被官化、あるいは近隣の土豪層との連合を基に村落を支配したという小領主論・地主論自体が、主体的・自立的な村落の実態を説明した近年の村落論によって成立しえないものとなっている。つまり、土豪層もそういった自立的な村落に存在基盤がある以上はその村落に規定されざるをえず、土豪層の権力への被官化、あるいは在地にお

ける土豪層の連合という側面は、村落における土豪層の役割という視点から捉え直されてきているのである。<sup>②</sup>このような村落における土豪層の果たした役割については、今後さらに具体的に深めていくべき問題であると考えるが、また一方で土豪層が被官化していた権力側についても再検討されるべき問題が含まれていると思われる。

これまで、土豪層が被官化していた権力、すなわち領主層については、領主制論の視点から国人領主あるいは在地領主として概念化され、その領主制とは彼らが在地の土豪層を個別に把握することでその下の村落自体を支配するものと捉えられていた。<sup>③</sup>しかしそれは、国人領主と主従関係を結んだ土豪層が、村落内においては周辺百姓を被官化させて村落を主導する存在であったという前提があったためで、その部分が先にあげた村落論によって否定されることとなる以上、現在では戦国期については国人領主制という

概念自体も成り立たないものになってきている。

一方、戦国期領主権力の研究は、主に東国の領主を事例に進展がみられ、そこでは家中の組み替えや排他的・一元的所領の形成、「家」支配と領域支配の一体化という、室町期までの領主権力からの変質と戦国期的な地域権力の成立が論じられている<sup>3</sup>。そして、この地域権力としてのあり方は、基本的に戦国大名や、その大名に従属している大名領国周縁部の国衆においても同質であると捉えられ、その国衆のあり方、また戦国大名領国における国衆の位置づけについても具体的な研究が蓄積されてきている<sup>5</sup>。

こうした東国における国衆論では、「家」権力として同一の構造を持つ戦国大名と国衆の従属関係は、国衆による軍役等の負担とそれに対する大名による国衆所領の保全、具体的には国衆の所領紛争における大名の軍事的協力という関係にとどまり、国衆の自立的な所領自体に大名が直接介入するものではなかったという。また、大名と国衆が従属関係を結ぶ際も、どの大名と結ぶかは国衆側によって主体的に選択されており、その大名が国衆の所領保全にとつて頼りないと判断されると、国衆は別の大名と主従関係を結ぶのである。このような国衆のあり方は、戦国大名の家中として構成されている領主（給人）とは明確にその性格を異にするものとして位置づけられている。

しかし、国衆を始めとした戦国期の領主権力に関する研究は、ほぼ東国の領主を対象とした検討のみで、しかも他の地域においてはそういった領主権力自体があまり研究対象として取り上げられてはいない。特に畿内近国においては、国人領主・在地領主という捉え方が、いまだ基本的な見方となっているといえる。このように、東国の領主権力研究が他地域の研究にとり入れられていないのは、東国と畿内近国・西国では権力の性格や在地社会のあり方が異なるという考え方が根底にあるためと思われる<sup>6</sup>。

そこで本稿では、東国における領主研究の成果をふまえ、畿内近国を事例としてその領主の動向や性格を検討することにする。ここで畿内近国における領主の権力的性格を明らかにすることにより、権力の性格や社会のあり方の地域性という考え方に対し再検討を迫りうるであろうし、また土豪層の村落における動向・役割を具体的に考えるための前提をつくることができる<sup>7</sup>と考える。そのための具体的事例としては、近江国坂田郡箕浦を本拠とした今井氏を取り上げて分析する。

## 一、戦国期における今井氏の動向

今井氏の出自・系譜に関しては不明な点が多いが、一般

戦国期畿内周辺における領主権力の動向とその性格（長谷川）

的には藤原秀郷の後裔で、初めて近江国坂田郡箕浦に住した三郎太夫俊季より四代後の俊綱が今井氏の祖であるとされ、その後の今井氏の動向は「今井軍記」にみることでできる。しかし、今井氏の動向やその性格が史料上確認できるのは戦国期に入ってからである。それは、今井氏家臣であった嶋氏により記録された「嶋記録」が残っているためで、そこには戦国期の嶋氏の当主秀安が記した記録と、その当時に発給された今井・嶋等宛の文書が引用されている。この「嶋記録」から戦国期における今井氏の動向が確認できると思われるため、以下順を追ってみていきたい。

応仁の乱以降、江南の六角氏と江北の京極氏は対立を深め、江北においてはその後、京極氏被官であった浅井氏が京極氏を擁して六角氏と対峙するといった状況になっていた。そして、両権力の境目となっていたのが坂田郡一帯で、今井氏を含む同地域の領主は状況により六角・浅井両氏の何れかに与し、その領域は絶えず戦場とされた（後掲地図参照）。今井氏は、応仁の乱以前から京極氏の被官となっていたが、大永年間以降に浅井氏が台頭してきたことにより京極氏を離れ六角氏に付いた。しかし、享祿四年（一五三一）には浅井氏に箕浦庄の今井館を攻められ、さらに六角氏敗北によって、その後は浅井氏に従うことになったようである。そのような状況の中で、天文元年（一五三二）六

月に六角氏と浅井氏が和睦すると、翌天文二年正月に今井氏当主秀俊は浅井亮政により神照寺において生害させられている。今井秀俊生害の理由は明らかではないが、「秀俊蒙京極殿之御勘気、被仰付切腹」や、「今井左衛門尉秀俊京極殿御不審をかふり、江北にて浅井備前守亮政ために生害せられければ」、あるいは「今井秀俊南心アルヨシニテ」とあることから、京極氏に従っていた今井氏が、京極氏を離れ六角氏に与したことや、浅井氏に属することになった後でも、いまだに六角氏寄りであったことが京極氏の勘気を蒙り、それが原因で生害させられたものと推測される。

当主を殺害された今井家中は、秀俊の子尺夜叉丸を立てて引き続き浅井・京極方に付いて本領を維持する道を選ばず、尺夜叉丸と共に本拠である箕浦庄を去って六角定頼の本拠観音寺城へ向かい、六角氏に与して浅井・京極方と敵対することになる。そして今井氏は、犬上郡の敏満寺に住居を定め、六角定頼により近隣の「平田跡」を「今井堪忍分」として与えられている。

「堪忍分」とは、東国の戦国大名北条氏の例では、武田氏の滅亡に際し本領から没落し北条氏に従属した遠江の国衆天野藤秀に対し、「当表へ被相移候、仍為堪忍分森下分進之置候、此度出馬火急之間、先為住居遣候、本意之間堪忍之儀者追而可申合候」と、北条氏の領国内に当座の住居とし

て知行地を宛行っている例や、今川氏の旧臣でその滅亡後に北条氏についた岡部和泉守に、「為當意堪忍分、小机筋麻生郷進之候」と、知行を与えている例など、本領を失った国衆に対して、あるいは上総の正木時忠の一族正木彦五郎に対し、「當意為堪忍分進置候、相當之所連々見立可申付候」と、当座の堪忍分とその後相當の所領宛行を約束している例など、国衆の一族で政治的に自立していない領主に対して、北条氏から与えられた扶持分としてみえる。これらはいずれも、「本領之替<sup>20</sup>」として与えられたもので、大名北条氏と新たに從属關係を結び自己の本領を回復するまでの当座の住居・知行分として「堪忍分」が与えられたものと捉えられる。そうすると、今井氏が与えられた「堪忍分」も、北条氏の事例にみられるものと基本的に同様のものと考えられる。

また、東国における戦国大名と国衆との關係をふまえて考えると、今井氏の場合も「堪忍分」の宛行により六角氏の家中として家臣化したのではなく、進退の保証や所領の維持のため六角氏と主從關係を結び、それに伴い「堪忍分」を本領回復までの間与えられたものと捉えることができる。その後、今井氏は六角氏との主從關係Ⅱ軍事的協力をもとに、自己の本領である箕浦庄を回復するために境目の城攻めを行うことになる（「嶋」八・九）。

六角氏は、そのような境目領主の要請に従い「如存知来年必北之儀可申付」と、本格的に江北を攻めることを決し（「嶋」七）、天文七年（一五三八）五月に六角定頼が佐和山城を落とすと、同じく境目の敵城である鎌端城攻めにとりかかっている。おそらく、それに伴って今井氏もそれまでの居所敏満寺から鎌端城のすぐ西に位置し、より本領に近い菖蒲嶽砦に移ったものと思われ、そこで鎌端城からの通路を塞いでいることが知られる（「嶋」一四）。この菖蒲嶽砦は、鎌端城を攻めるためにも、また今井氏の本領回復にとっても重要な意味をもっていたが、この地は浅井方との境目の最前線に位置しているため、敵方へ寝返らない意志を表明するためであろう、居所を移す際に今井氏当主の定清（元の尺夜叉丸。「定」は六角定頼からの偏諱と思われる）は人質として二歳になる自分の子と、家来である嶋秀宣の子を觀音寺城へ入れている<sup>23</sup>。そして、その鎌端城が同年六月四日に落ちると、今井氏は六角氏に擁立されていた京極高慶に箕浦庄とその周辺地域の支配回復に努めるよう申しつけられている（「嶋」六六）。その後も六角氏はさらに北へ戦線を進め、同年九月には国友河原での合戦で浅井方に勝利し、京極高慶を江北に入部させるに至ると、それに伴い今井氏も本領及び周辺所領を回復したと考えられ（「嶋」一九）、今井氏は敏満寺から菖蒲嶽砦に居所を移した御礼を

戦国期畿内周辺における領主権力の動向とその性格（長谷川）

かねて六角氏に「貳千疋」を送っている。<sup>②⑥</sup>しかし、京極高慶は江北支配を維持することができず、翌年には今井所領の内でも北に位置する忍海庄が不知行となっている（後述）。

天文一〇年（一五四一）頃になると、それまで浅井亮政の保護を受けていた京極高広が浅井氏に対して兵を挙げたことにより、また翌一年に浅井亮政が死去したことも重なることにより、また翌一年に浅井亮政が死去したことも重なって、亮政の後継者久政は同一三年にそれまで敵対していた六角氏と結び京極高広に対抗している。<sup>②⑦</sup>京極高広の挙兵には、元京極氏被官の多くが従うこととなったため、六角・浅井両氏の講和に際してはそれぞれの去就を明確にすることが必要となり、浅井氏に従っていた者はその本拠小谷城へ人質を入れるので、六角氏に従っていた今井氏は佐和山城へ人質を入れるように求められている（「嶋」一三）。しかし、京極高広がさらに勢いを増し浅井氏の居城近くまで攻め入るようになると、浅井久政はそれを支えることができなくなり、天文一九年（一五五〇）頃に再び京極高広と結んだため、それによって六角定頼との和議が崩れ、今井氏を含む境目付近の領主は再び境目の最前線に位置することとなった。

浅井氏と結んだ京極氏は、六角方に付いている境目領主を味方に勧誘し、今井氏に対しても天文二〇年（一五五一）に「対当可為忠節候間、訴訟儀者聊不可有等閑候」（「嶋」

六八）と所領の安堵を約したり、「堀石も同心候条、相談同前（其勸簡要候）」（「嶋」六七）と、近隣領主である堀氏も味方となったのだからといって同心を求めている。今井氏は、その誘いに応じて六角氏を離れ京極・浅井方に付くことにし、同年末にようやく本拠である箕浦城への帰城を果たす（「嶋記録」及び「嶋」一七・一八）。ここで、天文二年に在所を離れ浅井・京極方から六角方へ従属していた今井氏が、およそ二〇年ぶりに浅井・京極方へ再び従属することでの所へ復帰することになった。

しかし、浅井・京極方への従属関係も、天文二二年（一五五三）一月に浅井・京極方が六角義賢に破れ和睦を結ぶと、<sup>②⑧</sup>先年に六角氏から離れて浅井・京極方へ付いていた境目領主の立場は微妙なものとなり、今井氏の他、堀氏・若宮氏といったその周辺領主は、その後の永禄二年（一五五九）五月に浅井・六角両氏の和睦が破れ、再び浅井氏によって味方に勧誘され、これに応じるまでの約六年間、それぞれ現在の在所に引き籠もりどちら方にも味方しないという状況になったようである。それは、和議が崩れた直後に浅井方の佐和山城を六角氏が攻めようとした頃、今井氏当主定清が浅井氏の小谷城に登城していることや（「嶋」一六）、浅井氏が若宮氏に「於御同心者、為配当参百石可進候」と述べていること、また六角承禎（義賢）が「堀父子間之事、

最前如申和談可然候」(「嶋」一五)と勧誘していること等から知ることができる。しかし、この六年間、それまで自己の所領を保持するために大名権力に結集していた領主が、どちらにも従属せずに所領を維持しえたのは、それまで対立していた浅井・六角両氏が和睦し、境目であった領域に一定度の平和状況が創出されたためで、そのような状況はむしろ特殊であったと思われる。そしてこれ以後、今井氏を始めとした周辺領主は浅井氏に従属したことで、永禄五年頃までは彼らの領域が境目の戦場地帯となり、今井氏当主定清は永禄四年(一五六一)七月一日に境目の城である太尾城を攻撃中に、味方討ちにあい戦死している(「嶋」三三・三五)。その後は、当主定清の子小法師丸が幼少で当主を継承することになる。

その後、永禄六年(一五六三)一〇月に観音寺騒動が起こり、六角氏勢力が著しく減退すると、六角氏との境目は坂田郡よりかなり南に押し下げられ、それに伴い今井氏の周辺領域は平和状況が保たれたが、元亀元年(一五七〇)四月に浅井長政(久政の後継者)が織田信長との連合を破棄して敵対したことにより、この地域に再び危機的状況が訪れることになる。今井氏は姉川の合戦に出陣し、敗退した後は浅井氏の重臣磯野員昌と共にその居城であった佐和山城へ向かい、その後約半年にわたって在所を離れて籠城

している(「嶋記録」及び「嶋」四四・四五・四六・四八・四九)。その後、元亀二年二月に佐和山城を開城し織田方へ城を明け渡したが、今井氏は織田方に降らなかつたため箕浦に帰城することが叶わず、河内畑から美濃の時山に牢籠する。その後も今井氏は浅井方から同心を求められ(「嶋」四七・五四)、本領の回復を約束されて浅井方に三度与することになるが(「嶋」五五)、その時点で浅井氏に今井氏の所領を保全するだけの力はなく、所領安堵も空手形のまま天正元年(一五七三)八月に浅井氏は滅亡する。

このように、今井氏の周辺領域は浅井・六角両氏という大名権力のちやうど境目に位置し、つねに近隣との対立・戦争状況にあつたため、その時々状況に従い何れかの大名権力に従属し、自らの領域を保持しようとしていた。具体的には、今井氏の例からもわかるように、自己の所領保全とその他のための調停・軍事協力を大名権力に求めていたことがわかる。しかも、自らが頼る大名をも、その時々状況により境目領主側が主体的に選択していたことがうかがえるのである。だからこそ、自己の所領が維持できる状況であれば、どちらの大名にも与しないという事態が生じたのであろう。また、このような境目領主の動向は戦国大名の家中的な存在とは捉えられず、むしろ東国において戦国大名領国の外縁部に存在していた国衆との類似点を指摘

戦国期畿内周辺における領主権力の動向とその性格（長谷川）

しうる。<sup>(36)</sup> その点については後に検討することにして、次に今井氏の所領についてみていきたい。

## 二、戦国期における今井氏の所領

今井氏の所領については、これまで具体的には解明されていない。「今井軍記」には、今井氏が室町期に箕浦を中心とした周辺所領の諸職を宛行われたという記事があるが、実際に戦国期においてはどうかであったのだろうか。

天文二〇年（一五五一）に六角氏から浅井氏へ従属した時、今井氏は浅井氏から「太尾於相果者可進置候」と太尾城の攻略を条件に新知所領の宛行を約束されている。その所領は、箕浦城を中心とした周辺所領であるが、それ以前にその新知には含まれていない「忍海庄」について、浅井氏から穿鑿されている。

忍海庄本所事、元者嵯峨鹿苑院領候、有子細而代官職預り申取沙汰仕候、然処寺社本所国押領ニ成候時、私今井十五代秀遠代也、文明年中ヨリ此方知行、（中略）

〔此天文二年ニ  
定清南へ半龍  
ト聞ヘタリ〕

て有、

如此けし

右、如此国ニ在之時者知行仕来候、然間先年亮政より親ニて候者時、御折紙給候、御文言等子細在之事ニ候、只今御穿鑿迷惑仕候、此等之趣具可被仰調事、偏奉頼候、恐々謹言、

「覚、天文廿一ト見ヘタリ」

卯月六日

今井左近尉

浅井又次郎殿

「石見守若名也」

赤尾美作殿

雨森弥兵衛殿

参

ここで今井氏は、「忍海庄本所事、元者嵯峨鹿苑院領候、有子細而代官職預り申取沙汰仕候、然処寺社本所国押領ニ成候時、私今井十五代秀遠代也、文明年中ヨリ此方知行」と、元々代官職を持っていた忍海庄において、応仁文明の乱以降自己の所領として知行してきたことを述べている。そして、その知行は度々断絶しつつも「国ニ在之時者知行仕来候、

然間先年亮政より親<sup>ニ</sup>て候者時、御折紙給候」と、今井氏が「国」<sup>①</sup>自己の在所にいた時は間違ひなく知行してきており、それは浅井亮政によつても安堵されていることを主張し、「只今御穿鑿迷惑仕候」と大名浅井氏による今井氏の所領への干渉を「迷惑」として退けている。浅井氏がどのように穿鑿してきたのかは明らかではないが、この文書の「<sup>②</sup>覚書」に「忍海庄布施村今井本所、浅井殿より改被申事あり」とあることから、今井氏の所領であつた忍海庄を改める、すなわちその在所を調査しようとしたの対し、今井氏は自己の所領を大名に調査されるいわれはないと述べているものと推測できる。そうすると、このような今井氏の所領は、大名との従属関係によつて大名の知行制に再編成されたり干渉されたりする性格のものではなく、今井氏が独自に領域支配をしえた自立的な所領であつたと捉えられる。

また、今井氏の居城があつた箕浦庄に關しても、この時の新知には含まれていない。姉川合戦から佐和山開城を経て、再び元龜三年（一五七二）に浅井氏に從属した時には、「御一味付而申談条々」として、まずはじめに「箕浦地頭本所事」と箕浦庄一円所領を約束されているが、この時今井氏は在所を離れて美濃の時山に牢籠していたため、所領宛行の対象として箕浦庄もあげられているのである。しかし、

天文二一年（一五五二）の段階では、今井氏は六角氏時代に居城としていた菖蒲嶽砦から在所へ戻つており、その上で新知としてあげられていないということから、箕浦庄も先の忍海庄と同様に在所に在る限り今井氏が維持しうる自立した所領であつたと考えられる。すなわち、新知として宛行の対象となつていないこれら二つの所領が、今井氏の本領であつたと捉えられ、また自立した所領として大名浅井氏にも認識されていたからこそ、浅井氏により安堵されることがあつても、宛行われるという性格の所領ではなかつたことがわかる。

しかし、箕浦庄が忍海庄と異なり、浅井氏によつて干渉されていないのは、箕浦庄が今井氏の本拠であり居城もあつて、今井氏の所領であることが間違ひなかつたためと考えられる。箕浦庄は、天文二年（一五三三）に今井氏が本拠を離れて以来不知行となつていたと思われるが、天文一五年（一五四六）には箕浦庄にある惠福寺に対して今井定清が買地安堵をしていることから、<sup>③</sup>おそらく今井氏が敏満寺から菖蒲嶽砦に居所を移して間もなく箕浦庄の知行も回復したものと推測できる。また、その知行の内容については、今井氏が箕浦庄において独自に「公文・定使」を設定していることが注目される。<sup>④</sup>すなわち、北条氏の事例では、「小代官」「名主」といつた収取担当者を大名が直接設置していた



所領は、大名の直轄領あるいは家臣（給人）所領など、大名の知行制に包摂された範圍<sup>42</sup>のみで、その外縁部にある国衆の所領では国衆が独自で設置するという、大名とは別の収取体系が作られており、その体系に大名が直接介入することはなかったことが解明されている。そうすると、今井氏の箕浦庄の場合も大名の知行制に包摂された領域ではなく、今井氏の一円的・自立的な所領として存在していたといえる<sup>44</sup>。

一方、忍海庄は今井氏の所領のうち最も北に位置し、今井氏が六角氏に従属している間は浅井氏との境目地域の最前線にあつた。そのため、忍海庄も天文二年に今井氏が本領を離れてからは不知行となっており、以後天文七年（一五三八）から同八年三月までは京極高慶の江北入部に伴い知行が一時的に回復されているが、基本的に不知行であつた。その後、同一三年に今井氏は忍海庄の知行を回復するのであるが、「但南之筋ノ間半分不知行」とあり、今井氏は六角氏に従属していたため半分のみしか知行できていない。つまり、権力の境目地域のこの所領においては「半納」「半済」という状況になっていたのである。

こうした年貢の「半納」については、峰岸純夫氏が分析しており、そこでは東国の境目領域には広範に「半手」地域が存在し、それが境目領域の郷村の「侘言」により創出

されたものであつたことが明らかにされている<sup>45</sup>。村の側は、敵対する二つの権力からの年貢・公事の催促によって二重に収納されるという事態を避けるため、一定量の年貢・公事を両権力で折半するように求めるのだが、また権力側も一方の勢力の侵入を排除して単独で領域を維持しえないため、村側のそのような要求を承認せざるをえないという。つまり、敵方との境目領域はその侵攻を常にうける可能性がある地域でもあるため、領主がその地域の危機管理を完結できなければ、そこからの全年貢・公事を収取することができず、それでも領主がその地域を維持するためには、再生産維持を求める村側の要求を受け入れ、村がそれまで負担していた年貢・公事を敵方と折半することで一定の収取をするしかなかったのである。

このような研究をふまえて考えると、忍海庄における「半納」の実態も理解しうるものと思われる。すなわち、当時の忍海庄周辺は、天文一〇年（一五四一）に京極氏が浅井氏に挙兵して以降、同一三年（一五四四）に近隣の国友（長浜市）・長沢（近江町）・加田（長浜市）などが京極氏によって攻められていた<sup>46</sup>。つまり、それまで浅井・京極両氏によって知行されていた当地域が、浅井氏と京極氏との対立によって、京極氏対浅井・六角両氏の戦場となったのである。それにより忍海庄周辺は、京極方の勢力やそれに敵対する

今井氏が当知行をめぐって争い、常に侵攻されていたのである。そこで今井氏が京極方の勢力を排除できれば、今井氏はその所領を全部知行することができたのであろうが、実際は今井氏がその地域の保護者として地域の安全を維持できなかったため、「半納」という状況が創出されたものと考えられる。この場合、残りの半分は京極氏側が収取したものである。

そして、このような「半納」という状況が、天文二二年（一五五二）に忍海庄が浅井氏によって「改被申」という事態をもたらしたものと想定できる。すなわち、大名権力は所領の保全を求めて従属してきた領主に対し、当知行を原則として所領を安堵するが、「半納」の所領の場合はどちらが当知行しているかを判断することが困難なため、浅井氏はその判断のためにあれこれと穿鑿してきたものと捉えられるのである。実際に今井氏が浅井・京極方に従属するにあたって、京極氏によって「対当家可為忠節候間、訴訟儀者聊不可有等閑候」と、当知行あるいは境界をめぐる相論においてないがしろにしないことを約束されていることからわかるように、それまでの今井氏の所領の内には他との係争地を含んでおり、まさに忍海庄のような「半納」の所領がそうした係争地と認識されていたと思われる。しかし、こうした「半納」の地においても、今井氏が「国」に在

之時者知行仕来候」と、在所にいればその地域の領主として知行がなしかたと主張しているのは、在所に今井氏が居住していれば、村側にとっても村の再生産を維持し、領主の責務である危機管理を行う者として承認されていたため、その意味で忍海庄は大名権力からは自立的な所領であつたといえるのである。また逆に、箕浦庄は浅井氏から所領の穿鑿を受けず、しかもその地域が「半納」にもなっていないことから、今井氏が当知行している所領として、またその地域の「公」権力として大名側にも村側にも承認されていたものと判断できる。

ちなみに、「半納」が行われるような境界領域に近い地域においては、領主層同士でも所領の保証を相互に行っている。箕浦庄よりも境目に近い宇賀野にある清定院が宝勝坊から買得した下地に対して、この地域に所領を持っていたと思われる百々信光が買地安堵を与えているが、その中で「堀殿・今井殿へも其趣可申候」と、近隣の領主である堀氏や今井氏にも同様に知らせておく必要を記している。つまり、この地域の在地における土地移動の保証について、その地の領主と近隣の領主が保証主体として機能しているのである。当時、百々氏と今井氏・堀氏は同様に六角氏に従属しており、いわば味方の者であつた。このような領主層相互の関係は、「近所之儀」として分析されているが、より

戦国期畿内周辺における領主権力の動向とその性格（長谷川）

厳密には、この場合同様に北側に敵方と所領を接する領主が、敵方からの所領維持という同一目的のために結集したもので、その意味では唯一絶対的なものではない。実際に、境目の向こう側の領主とは対立する関係であるし、ここで味方であった堀氏も元亀元年に織田信長が近江へ侵攻してきた際に織田氏に従属して今井氏と対立している。しかし、ここから境目領主は大名権力に所領維持のための保護を受けると同時に、同じ大名への従属のもと、領主層独自で所領維持という同一目的のために相互に保証する体制も作り出していたことがわかるのである。

このように、今井氏は箕浦庄・忍海庄といった地域を本領として、大名権力がその内部に介入できないような自立性の高い所領を形成していた。その所領は、今井氏が在所を離れることで一時的に維持できなくなるが、知行を回復してからは箕浦庄に関してはそこにおける唯一の権力として在地の土地移動をも保証しえ、また忍海庄に関しては敵方と半済になりながらも、近隣領主との協力に基づき維持しようとしていたことがわかる。また、天文年間においては今井氏など境目領主が六角氏に従属していたので、必然的に軍事的境界が彼らの所領の北側に創出されるのであるが、逆に浅井氏に従属してからはその境界は南側に設定されることになる。つまり、彼ら境目領主がどちらと結ぶか

によつて境目が変わるのである。したがって、常にその所領は境目となる地域であるため、他の侵攻を排除しにくい所でもあった。このような状況から、自己の所領を維持するためには、いずれかの大名権力に結びつく必要がある、大名側もこのような境目領主の要求を体现できないと、領主側に離叛してしまうのである。そうした大名と領主の関係や領主の性格について次にみていきたい。

三、今井氏の領主権力としての性格

ここでは、今井氏の領主としてのあり方を考えるために、今井家中の問題、大名との取次の問題、大名との関係という三つの視点からみていくことにする。それは、これまでの研究ではこれらの論点から今井氏権力の性格が規定されてきたためである。

はじめに、戦国期の今井氏の家中は、外部から「内輪」「家中」（「嶋」二一・四七等）と呼ばれており、そこには「同名」「一門」といった今井氏の一族庶子と「家来」「被官」（「嶋」七等）といった今井氏の家臣が存在していた。このうち、「同名」「一門」とは今井名字を名のる広義の一族を指しているが、その内部は当主継承権を有する、いわば当主の身分的立場の者と、今井氏の家臣に包摂されている者から構成さ

れている。また「家来」「被官」は、はるか昔に派生してすでに今井名字を名のれなくなった庶子を含む今井氏の譜代家臣と考えられる。「同名」「一門」のうち、ごく近親の一族は、今井氏の中で家臣に包摂されない独自の地位を形成しており、その構成員は天文七年（一五三八）六月一日の今井秀象他四名連署起請文写（「嶋」六）に連署している者と考えられる。一方、家中に包摂された今井同名は、「今井中西」のような室町期から戦国期にかけて派生した庶子と考えられ、譜代家臣と共に家中を構成し、その中には「宿老」（「嶋」九等）と呼ばれた「年寄」「御長衆」（「嶋」二七・六一）という家中の中心的集団が形成されていた。

これまでの研究では、今井家中のうちの今井中西氏は今井「同名」中<sup>⑤</sup>今井氏一族であり、家臣とは区別される存在と捉えられてきた。確かに、今井中西氏は譜代家臣から「殿」付けで呼ばれており（「嶋記録」野村合戦侍分書付）、その意味で家中内における身分的差異があったとは思われる。しかし、今井中西氏は天文七年に幼少の今井氏当主を補佐するための名代に、先に示した今井氏一族の起請文により選ばれて、今井氏の領域支配を任されている（「嶋」六）。これは、当主の領域支配を補佐するのが当主のごく近親の身分的立場の一族ではなく、あくまで家臣の役割であったことから、今井氏一族によって今井氏当主を補佐する中心

的役割を委任されたものと解釈することができる。つまり、今井中西氏が今井氏家臣であったからこそ、基本的には領域支配に関与しない一族により委任されたものと捉えられるのである。その際、家臣の中で今井中西氏が選ばれたのは、おそらく家臣内での序列や身分の高さが、家中をまとめ領域支配を行う上で有利に働くと思われたからであろう。<sup>⑥</sup>これらのことから、戦国期の今井氏の「家中」は、室町期までの庶子や譜代家臣を被官として同列に組み替えたものであり、松浦義則氏のいうような「家」構造の変質によって成立した戦国期的な「家中」であったと考えることができる。そしてそれは、室町期までの自立的な庶子に対して、幕府による所領保全を惣領が取り持つことでその統制を維持していた領主制とは異なり、惣領の独力による所領保全を通じて自らの「家」構造に組み入れた、いわば変質を遂げた戦国期的領主制であったと捉えられるのである。

次に、今井氏と大名との間を取り結ぶ大名側の取次について考えてみたい。今井氏が天文二〇年（一五五一）に浅井氏に従属して以後、当初は浅井氏重臣の赤尾清綱が取次を務めていたようで、大名浅井氏への書状を赤尾氏を通じて出したり（「嶋」一九）、今井氏家臣である嶋秀安が隠居の申し出をしたことに対し、浅井氏からの、以前の通り今井家中に出頭するように、との意見を取り次いでいる（「嶋」

二〇・二一）。しかし、永祿四年（一五六一）に磯野員昌が佐和山城へ在城するようになって以降は、今井氏への取次は赤尾氏から磯野氏へ変更されたようで、それ以降は今井氏は磯野氏と共に軍事行動を行っている（『嶋』三三・三五・四〇）。また、今井氏内部で家中相論が起った際に、磯野氏が仲介してその相論を解決していることが知られる（『嶋』四一・四二）。これらのことから、元亀元年（一五七〇）の姉川合戦において今井氏が磯野氏の軍勢として出陣し、その後磯野氏と共に佐和山城へ籠城するという動向は、こうした磯野氏による取次関係に基づいて行われたものと捉えられる。

このような取次のあり方については、すでに北条氏と国衆との間の事例で研究がなされている。そこでは、大名との取次を果たす者を「指南」と表現し、その役割は所領の安堵・宛行を取り持ったり、国衆の家中内部の問題を仲裁したり、さらに軍事行動においては「指南」が国衆の軍勢に対し軍事指揮にあたり、「指南」と国衆の軍勢が同一行動をとるなどのことが指摘されている。そうすると、今井氏が忍海庄の知行を主張した書状を取次の赤尾氏に宛てて出していることや、今井家中の相論が磯野氏の「意見」で仲裁されたこと、また境目の城を今井氏が攻めたときに磯野氏が「小谷衆」として同陣していることや、姉川合戦で今

井氏が磯野氏の軍勢として組み入れられていることなどの動向は、すべて北条氏の「指南」と同様の役割を赤尾氏や磯野氏が行っていたことによるものとして理解することができる。

これまでの研究では、今井家中が大名浅井氏や磯野氏から所領の安堵・宛行がなされていることや（『嶋』二四・二五・四四・四五・四六）、今井氏が磯野氏の軍事指揮を受けていることなどから、今井家中が浅井氏によって解体され、今井氏とその家中が直接大名浅井氏に把握されるようになり、また磯野氏とはそれぞれ寄親・寄子制的な関係で結ばれるという再編成がなされたと捉えられてきた。確かに、所領安堵・宛行がなされた所領は今井氏の支配領域内であるため、本来ならば今井氏が家中に対して行うべき事であるが、北条氏の事例でも国衆の家中の中心的存在に対しては、国衆への所領安堵と同時にその家臣に対しても直接大名や「指南」が行う場合もあったことが知られており、あるいは今井氏当主が幼少であったために、取次である磯野氏が直接行っているとも考えられる。また、軍事指揮に関しても、先に述べたように北条氏の事例で「指南」の役目として位置づけられている。さらに、磯野氏は今井氏の家中相論に対しても、「各内輪之儀、小法士殿御幼少」だからといって「新儀非分之儀」（『嶋』四一）はあってはならないとして、

今井氏同名(一族)・家老衆がそれぞれ浅井氏と「御家之置目・諸知行田畠等、毎時古左衛門尉・備中守殿如御代之可有裁判候」(嶋「四二」という内容の起請文を取り交わして解決していることから、浅井氏及び磯野氏は、今井家中の内部を直接把握したり解体したりはせず、あくまで今井氏当主と家中という体制を維持させようとしていることがわかるのである。

したがって、これらのことから、従来のように今井氏の家中が解体され浅井・磯野氏のもとに再編成されたとは捉えられず、むしろ磯野氏を取次とした大名浅井氏と今井氏との従属関係と捉えた方が理解できると思われる。すなわち、大名との従属関係に付随する様々な事柄は取次である浅井家臣を通じて行われ、そのあり方は戦国大名北条氏と国衆間を取り次ぐ「指南」と同様であったのであり、それゆえに今井氏と浅井氏の関係も、北条氏と国衆の関係と同様なものであったと捉えられるのである。

以上の二点をふまえ、最後に第三点目の今井氏と大名権力との関係についてみてみたい。先にも述べたように今井氏の所領は、基本的に大名権力の介入しえない自立的・排他的所領であった。今井氏は、本領を回復したと思われる天文七年(一五三八)に、「河内城普請今少不調所候間、人足一日被申付候者、可為祝着候」と、当時六角氏と結んで

いた京極高慶から河内城普請の人足を一日申しつけてほしいと頼まれている(嶋「一〇」)。これは、「其方ニも可入候得共、一日之事候間入魂簡要候」とあることから、本来は今井氏が自己の所領に賦課することができると人足の内から一日京極方へ出すことと捉えられ、逆に大名側からは直接今井氏の所領へ人足が賦課できない状況を示している。北条氏の場合も、大名が国衆領に対して賦課できる役は国衆自身にかかる臨時の普請役のみで、しかもそれすら直接国衆の在所に対してかけることはできず、まして大名が直轄領や給人領にかけている役を直接国衆領に対して賦課することはできなかったという。そうすると、京極氏も基本的に今井氏自身にかけられる決められた役以外は賦課できなかったため、このように今井氏自身への役として人足を申しつけているものと考えられる。またこのことから、今井氏は自己の所領において独自に在所へ人足賦課をしうる体制を有していたことがうかがえ、そうした今井氏の所領の性格は大名の知行制に包摂された大名家中の所領とは、基本的に異なるものと捉えることができる。

しかし、今井氏の所領は権力の境目に位置し、常に近隣の権益争いやそれに伴う他勢力の侵攻に対処せねばならなかった。そこで、近隣勢力の侵攻を排除して今井氏が自己の所領を維持するためには大名の軍事的支援が必要とな

り、そのため今井氏は自己の所領保全を大名権力に求めて従属関係を結ぶのである。その際、今井氏は主に大名に対して所領保全のための軍事的支援を求めたのであるが、今井氏にとって大名の軍事的支援が重要であったことは、天文二年（一五三三）に六角氏に従属して以降、六角氏と共に境目の城を攻めていることからもうかがえる。また、境目に居城があるために常に近隣から攻められる可能性があり、浅井氏が美濃へ出兵した留守に六角氏に佐和山城を攻められた百々氏が「驚テ後結ヲ申送ケリ」と、小谷城の浅井氏に援助を要求しているように、大名は危機的状況において在所への「後詰」をすることも求められていた。

さらに、ここで重要なのは、このような大名と領主の従属関係が、基本的に領主側の主体的な選択により成立していることである。今井氏が、天文二〇年（一五五一）に六角氏から浅井氏へ従属する前提には、浅井氏・京極氏からの勧誘があったためであるが、そこでの選択権は常に今井氏の方にあり、今井氏はどちらにつくことが所領保全のためによいかという判断に基づき、六角氏につくか浅井・京極氏につくかを決めるのである。このような性格も、大名の家中とは異なるものと捉えられる。

そして、どちらかに従属することが決まると、領主側は大名の居城へ登城することとなる。天文二年に六角氏を頼つ

た時も、「観音寺へ立ち越」（『嶋記録』）しているし、また永祿二年（一五五九）に再び浅井氏へ従属した時も、「今度者令登城候処、父子共色々懇之様鉢共候キ、殊新九郎具足到来候」（『嶋』一六）と、小谷城へ登城し具足を与えられていることがわかる。さらに、今井氏は大名との従属関係に伴い、人質を大名の居城あるいは近隣の城へ入れるよう求められている（『嶋記録』・『嶋』一三）。このような従属の際の様々な取り決めも、北条氏と国衆との間で従属時に行われる事と相似している。大名と今井氏の関係をみていくと、大名と領主今井氏との関係は、大名と大名家中との関係とは明確に異なり、むしろ北条氏と国衆にみられるような従属関係であると捉えることができるのである。

以上みてきたように、今井氏は室町期以来の自立的庶子を譜代家臣と同様に自己の家臣として把握し、大名権力と同様の「家中」を形成していたことが明らかとなり、また大名との関係はもっぱら取次を通じて維持されていたが、その関係は所領保全と軍事的支援を主とした従属関係で、しかもその関係自体が今井氏の主体性に基づいて結ばれるものであったことが確認できた。このような今井氏の領主としての性格は、戦国期的な領主、すなわち地域権力としての性格を示すもので、その意味で東国の戦国大名研究において明らかにされた国衆と同一の性格を持つものであつ

たといえる。つまり、東国の大名権力の周辺に国衆領が広がり、その国衆と大名が所領保全を主とした従属関係を結んでいたように、畿内近国においても大名権力の周辺には同様の領主が存在しており、彼らも大名と従属関係を結ぶ存在であったといえよう。

### おわりに

以上、戦国期における畿内近国の領主権力の動向とその性格を、東国における領主研究の成果をもとに捉え直してきた。それにより、畿内近国においても、戦国大名以外の地域権力が大名領国周縁に存在し、彼らと大名との関係においても東国の国衆の事例と同様の実態が確認できたと思う。東国の事例と畿内の事例が、その性格において同質であるとする、このような領主のあり方、また大名と領主が作り出す地域社会のあり方は、より多くの地域でみられるものと考えることができるだろう。また、そういった性格の領主権力に、土豪層は家中構成員として結集しており、ここでは領主は家中である土豪層から在地での矛盾や家中内の矛盾を地域の保全者として調停する役割を期待されていたのである。

しかしこれまでは、この地域における領主研究は主に国

人領主制という視点からなされており、特に今井氏の事例では、元亀元年と同二年に作られた「条々」<sup>①</sup>「掟」<sup>②</sup>（「嶋」四八・四九）の解釈をめぐって、そのような領主制が戦国の動乱により不安定化し崩壊した後は、用水支配を基礎とした土豪連合や、加地子収取のための土豪の「地域的一揆」体制<sup>③</sup>、あるいは危機的状况に対し村落まで含み込んだ「惣国一揆」<sup>④</sup>といった体制に変化すると考えられてきた。しかし、土豪連合や「地域的一揆」体制などの村落支配のための階級的結集という見方は、近年の村落論の成果によって、直ちに成立しえないといわざるをえない。

土豪連合や「地域的一揆」体制においては、土豪層の階級的結集が村々の連合に対して村落支配のために形成されたと捉えているが、日常的な村落間相論の実態は、村落同士が連合すること自体が容易ではなかったことを示している。つまり、そういった村々の連合は、むしろ他の村落との対抗のために同一目的のもとに形成されるもので、直接的に土豪連合による支配に対して結ばれるものではないと捉えられてきている。しかも、土豪層自体が村に基盤を持つ以上、村落における自己の立場を保持するためには、村落が権益確保のために行う村落間相論にかかわらざるをえず、実際にそうした土豪層を含みこんだ村落間相論が領主間相論に発展していくのである<sup>⑤</sup>。また、村落による年貢村

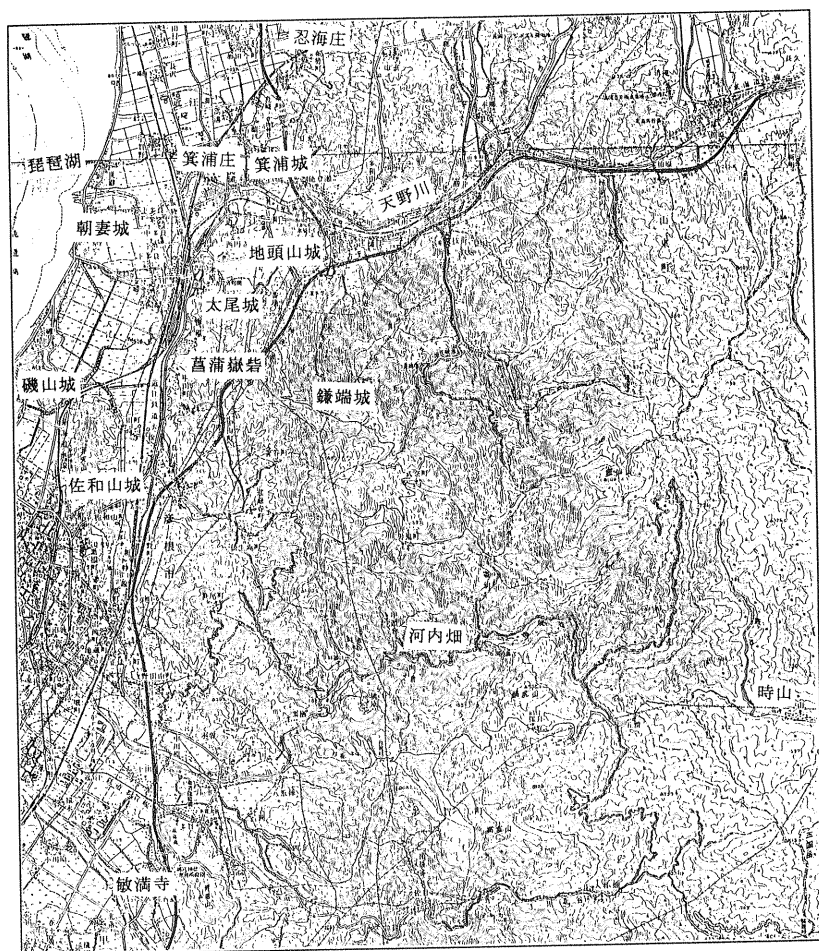


請の実現は、年貢を納める領主を村落が主体的に選択する契機となり、それにより領主など年貢を収取る側は村落の再生産を維持するための役割を求められ、それができない場合は年貢収取も確保できなかったのである。そういった実態から、土豪層の経済外強制による強圧的な村落支配・年貢収取という従来の捉え方は成り立たなくなってきた。

また、「惣国一揆」に関しては、その構成主体を領主の一揆と在地の一揆という、本来対立すべきもの同士の間合と捉え、それが連合する要因を村落に存在する二つの「侍」身分と地域の危機的状況に設定している。すなわち、領主に被官化した「侍」と村落内で村落上層が独自に形成する「侍」衆という二つの「侍」のあり方は、領主権力に対抗する村落の武力と力量を示すものであり、それは従来の支配の対象としての村落という捉え方を否定することとなるが、そうした村落と本来対立する領主との連合が形成されたのは、危機的状況下において両者が地域的防衛という共通の目的のためその対立関係を一時的に止揚し、村落内の領主被官であった「侍」を通じて村落の武力を取り込んだためであるとする。つまり、このような「一揆」は非日常的なあり方で、危機的状況において「危機管理」を主要な目的として初めて形成されるものであったと捉えているのであ

る。しかし、先に述べたように、領主と村落という階級間の矛盾と同等ないし場合によってはそれ以上に深刻であった村落間の矛盾に領主権力自体も規定されていたことを考えると、「惣国一揆」の実態をより具体的に理解するためには、危機的状況下における村落からの動員が行いうる前提としての日常的な領主と村落との関係を明らかにする必要があるといえる。

したがって、今後においては、在地レベルでの具体的な問題の検出と、その解決のあり方を明らかにしていく必要があり、とりわけ今井氏の事例においては、今井氏が地域権力であったことから、これまで階級的結集と捉えられていた事態を、今井氏の家中の連合と捉える視点から考えていく必要があると思われる。すなわち、今井氏という領主権力のもとに家中を形成していた個々の土豪にとつての問題を追究することによって、家中成立の具体的契機やそれによる村落と土豪、あるいは村落と領主権力との関係が立体的に把握しうると考える。



近江国坂田郡周辺城郭分布図（5万分の一：長浜・彦根東部より作成）

戦国期畿内周辺における領主権力の動向とその性格（長谷川）

註

(1) この問題に関する研究はかなりの数に及ぶため、一連の研究史をまとめている久留島典子「中世後期在地領主層の動向——甲賀郡山中氏について——」（『歴史学研究』四九七号、一九八一年）をあげておく。

(2) 久留島典子「中世後期の『村請制』について——山城国上下久世庄を素材として——」（『歴史評論』四八八号、一九九〇年）、稲葉継陽「村の侍身分と兵農分離」（同『戦国時代の荘園制と村落』所収、校倉書房、一九九八年、初出一九九三年）。

(3) 黒川直則「守護領国制と荘園体制——国人領主制の確立過程——」（『日本史研究』五七号、一九六一年）・「中世後期の領主制について」（『日本史研究』六八号、一九六三年）・「十五・十六世紀の農民問題」（『日本史研究』七一号、一九六四年）等。

(4) 峰岸純夫「戦国時代の『領』と領国」（同『中世の東国』所収、東京大学出版会、一九八九年、初出一九六九年）、松浦義則「戦国期毛利氏『家中』の成立」（広島史学研究会編『史学研究五十周年記念論叢 日本編』所収、福武書店、一九八〇年）等。

(5) 黒田基樹『戦国大名と外様国衆』（文献出版、一九九七年）・『戦国大名領国の支配構造』（岩田書院、一九九七年）。

(6) 例えば、宮島敬一『戦国期社会の形成と展開——浅井・六角氏と地域社会』（吉川弘文館、一九九六年）等。

(7) 『改訂近江国坂田郡志』第二巻および『近江町史』（共に以下『坂』・『近』と略記する）。

(8) 『改訂史籍集覧』一三。今井氏の始祖俊綱から清遠の代ま

で当主別に記されているが、応仁文明の乱以降の当主である高遠・秀遠・清遠に関する記載が特に多い。またこの「今井軍記」は、元禄八年（一六九五）三月に新庄内匠所蔵本を写したものである。新庄氏は近世では常陸国麻生藩主となるが、元は箕浦の近隣に住しており、戦国期には今井清遠の妹が新庄直寛に嫁いでいる。そのため、この「今井軍記」も清遠妹が新庄家に入った際にもたらされ、近世に至って「新庄内匠所蔵本」になった可能性もある。

(9) 『滋賀県中世城郭分布調査』七。その成立については小和田哲男「嶋記録所収文書について——近江天野川流域の戦国誌——」（『古文書研究』三三号、一九七〇年）に詳しい。なお、太田浩司「江北における土豪『一揆結合』の展開——『嶋記録』所収文書の史料批判をめぐって——」（『市立長浜城歴史博物館年報』一号、一九八七年）によれば、同史料は引用文書部分に宛名の改竄等があるとされているが、それ以外の部分に関しては、文書・記録部分共に当時の状況を示していると考えられる。

(10) 『江北記』（群書類従第二二輯合戦部）に「根本当方被官之事」にその名がみえ、その後には「一乱初刻御被官参人衆事」「近年御被官参人衆之事」等、応仁の乱以降に被官になったものが書き立てられていることから、「根本被官」とはそれ以前から被官であったものを指していると考えられる。

(11) （享禄四年）四月一二日浅井亮政感状（『三田村文書』『東浅井郡志』第四巻、以下『東』と略記する）・（享禄四年）五月一日足利義晴御教書案（『室町家御内書案』『東』）、「長享年後畿内兵乱記」（『続群書類従』第二〇輯上合戦部）。

(12) 「今井忠兵衛藤原秀隆系図」(「近」) には、「当家属六角殿、鶴翼二陣取足輕矢戦、当家敗北シ從淺井亮政」とある。

(13) 「今井忠兵衛藤原秀隆系図」。

(14) 「嶋記録」今井左衛門尉没落の事。

(15) 「今井系図」(「東」)。

(16) (天文二年)二月二五日六角定頼書状写(「嶋記録所収文書」五)。なお、「嶋記録所収文書」は、「嶋記録」に収録されている順に番号をつけ、以下「嶋」と略記する。

(17) 天文一〇年一月二七日北条氏照書状写(「天野文書」「戦国遺文 後北条氏編」二四五九号)。以下、「戦国遺文」は「戦」と略記する。

(18) 元龜三年三月一六日北条氏政判物(「岡部文書」「戦」一五八五)。

(19) (永祿九年力)一二月二五日北条氏照判物写(「正木武膳家譜」「戦」四六七八)。なお、正木氏の「堪忍分」については、黒田基樹「戦国大名北条氏の他国衆統制(一)——「指南」「小指南」を中心として——」(同前掲「戦国大名領国の支配構造」所収、初出一九九六年)において触れられている。

(20) 永祿六年四月一二日北条氏照判物(「市ヶ谷八幡神社文書」「戦」八〇八)。なお、本領喪失により「堪忍分」(扶持分)が給付されていたことは、黒田基樹「戦国期外様国衆論」(同前掲「戦国大名と外様国衆」所収、一九九七年)で述べられている。

(21) 黒田前掲註(20) 論文によると、国衆は戦国大名の「家」権力に包摂された「家中」とは異なり、所領支配や政治的には自立した存在であり、大名との従属関係は自己の「進

退」の保証や紛争の調停・協力などの大名の保護と、それに対する賦課・負担といった性格の従属関係で、いわば契約・双務の関係であると位置づけている。

(22) 「親俊日記」天文七年五月二三日条(「続史料大成」)。

(23) 「嶋記録」今井本領安堵望之事に、「北境目取出の望をなし、に、人質として二歳の若子并嶋か孫四郎観音寺へさし上、摺針山・菖蒲嶽取出ニして、鎌のはの通路をさゝる」とある。

(24) 「親俊日記」天文七年六月四日条。

(25) 六角定頼陣立注文(「朽木文書」四九一号)・「鹿苑日録」天文七年九月一六日条(「鹿苑日録」)。

(26) 「妙意物語所収文書」(「坂」)。

(27) (天文一三年)七月二六日種村貞和書状(「朽木文書」「東」)。

(28) (天文一一年)一月一日京極高広書状(「下坂文書」「坂」)等。

(29) 天文一一年一月二日浅井久政書状(「郷野文書」「坂」)。

(30) 天文二一年一月一四日浅井久政書状(「若宮文書」「東」)。

(31) (天文二二年)一月二六日平井定武書状(「西村文書」「東」)。

(32) 永祿二年五月六日後藤賢豊他二名連署条書写(「蒲生文武紀」「蒲生郡志」第九卷)。

(33) (永祿三年)一一月一九浅井賢政書状(「若宮文書」「東」)。

(34) 領主が大名と従属関係を結ぶ最大の理由は所領保全であり、それにより他領主との所領相論を解決しようとするためである。そのため、自己の知行を脅かす近隣の領主に対し、それとは別の権力に保護を求めるのが普通である。しかし、近隣領主に対抗するために他の権力と従属関係を結んだにもかかわらず、その敵対していた大名同士が和睦してしま

戦国期畿内周辺における領主権力の動向とその性格（長谷川）

うと、もはや近隣領主に対する対抗にはならず、その上大名同士の和睦により近隣領主の侵攻も休止されたことから、このような状況が創出されたものと考えられる。

(35) 「若宮文書」六・七・九（東）、「嶋」二六・六九。

(36) 黒田基樹「戦国大名北条氏の他国衆統制（二）——主従制論を中心として——」（同前掲『戦国大名領国の支配構造』所収）は、大名権力への従属や離叛が、国衆の自主的な判断によってなされていたことを明らかにしている。

(37) 天文二一年一〇月六日浅井久政書状写（「嶋」二二・二三）。

(38) 天文二一年四月六日今井定清書状写（「嶋」一九）。なお、ここで「」で示してある部分は、この文書が後に「嶋記録」に写された際に書き加えられた「覚書」であると思われる。

(39) 「嶋記録」には、嶋氏の子孫である嶋俊通がこの「嶋記録」を江戸時代初期に写した際に、「覚書」を付している。

(40) 天文一五年一二月一日今井定清書状（恵福寺文書「坂」）。

(41) （年未詳）五月九日今井定清書状写（「嶋」三三）。なお、同文書の差出は「定清」となっている。「今井定清」として初めて史料上確認できるのが天文一五年であることから、同文書はその前後から、同人が討死する永禄四年までの間と推定できる。

(42) 黒田基樹「北条領国における『小代官』と『名主』」（同『戦国大名北条氏の領国支配』所収、岩田書院、一九九五年、初出一九九三年）。

(43) 黒田前掲註（20）論文。

(44) なお、黒田前掲註（42）論文では、「小代官」等の任命は実際は「代官」によってなされ、それが大名北条氏に報告

され承認されるとしている。今井氏の場合も「箕浦公文・定使之事、依被申次郎右衛門仁相定候」とあることから、この場合も実態としては今井氏が承認を与えたものと捉えられる。

(45) 「東国戦国期の軍事的境界領域における『半手』について」（『中央史学』一八号、一九九五年）。

(46) 『近江町史』。

(47) 黒田前掲註（36）論文は、従属関係を結ぶ際に大名からなされる所領の安堵が、当知行をもとに行われていると述べ、それが領域の境界確定として機能していたことを明らかにしている。

(48) （天文二〇年）五月二三日京極高広書状写（「嶋」六八）

(49) 地域の危機管理を領主の責務と位置づけたのは藤木久志氏で、領主の存在意義は領民の保護という点に求められ、それによって領域支配や収取・賦課・動員が可能になることを明らかにしている（「領主の危機管理——領主の存在理由を問う——」同『戦国史をみる目』所収、校倉書房、一九九五年、初出一九九二年）。

(50) 天文一三年六月四日百々信光書状写（「覚書之写」、東京大学史料編纂所架蔵写真帳「中村林一氏所蔵文書」所収）。

(51) 藤木久志「戦国法の形成過程」（同『戦国社会史論』所収、東京大学出版会、一九七四年、初出一九六七年）。

(52) この文書の宛所は「嶋四郎左衛門尉」となっているが、これは「嶋記録」に写される際に宛所部分が改竄されたもので、実際は「今井中西家政」に宛てられたものであることが、太田前掲註（9）論文により明らかにされている。

(53) 「嶋記録」に「応永の比（中略）今井一門に中西といふ侍

とあることから、応永年間以前に中西氏は今井氏から派生していたことがわかる。また、「嶋記録」野村合戦侍分書付の「沢山籠城被相詰衆之事」の始めに「殿」付けて記載されている者は、名字が書かれていないことから今井氏の同名と判断できるが、今井秀隆のようなごく近親の一族が記載されていないことから、ここに載せられた今井氏同名も今井氏家臣として位置づけられていた者と考えられる。純粋な一族が書かれていないのは、この書付が「侍分」の書付であることによるものであろう。

- (54) 太田前掲註(9) 論文・湯浅治久『惣国一揆』と『侍身分論——在地領主・村落研究の接点を求めて——』(『歴史評論』五二三号、一九九三年)。

- (55) いわゆる執権・家宰・老中などがこれにあたる。ここでは、こういう者を想定している。

- (56) 松浦前掲註(4) 論文では、毛利氏の庶子家の内、毛利氏の家中に包摂された者が執権となり、毛利氏の「家」支配の代行者として「家」の統制をしていたことを明らかにしている。その際、毛利氏の庶子家が執権となるのは、毛利氏の親類をその身分を維持しながら惣領の「家」支配に包摂するために必要だった要件であるという。今井氏家中における今井中西氏も、このような執権と同様の役割を果たしていたと考えられる。

- (57) 黒田前掲註(19) 論文。

- (58) 小和田前掲註(9) 論文。

- (59) 黒田前掲註(20) 論文。

- (60) 「江濃記」(『群書類従』第二二輯合戦部)。

- (61) 藤木久志「戦国期社会における中間層の動向」(同前掲『戦

国社会史論』所収、初出一九七〇年)。

- (62) 宮島敬一註(6) 著書。

- (63) 湯浅前掲註(54) 論文。

- (64) 黒田基樹「宣戦と和睦(峰岸純夫編『今日の古文書学』第三卷中世所収、雄山閣出版、二〇〇〇年)。

(本学文学研究科史学専攻博士課程後期)